

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にもどのような稀観本(きこうぼん—

本館

稀

観

本

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物が収蔵されていることがある。については、ご専門のお立場から本館所蔵の稀観本をご紹介します

の中から

西洋服飾稀講書(13)

ヴェルネの『パリの物売り』

文化女子大学教授 石山 彰

日本にせよ、西洋にせよ、服飾史は概して上層社会の記述に偏して下層社会は無視されがちであるという素朴な疑問は、服飾史を学んだ人なら、だれしもが一度はいく疑問であろう。なぜそうなりがちであるかの理由について、今ここで述べている余裕はないにせよ、従来は確かにその傾向があり、とりわけ通史や概説となると、一時代の服装は、ひと握りの支配層によって代表させ、それよりもはるかに多いはずの被支配層の服装は無視される、という傾向があった。端的に、それは“量より質”を問うことになるからである。つまり、時代の特性は、支配層の服装にこそはっきりと示され、増幅されたかたちで変化のうねりは高まるから……というのが一つの理由であった。第2次大戦後の服装史研究には、そうしたこれまでの間隙を意識的に埋めようとする傾向が見られ、それが一つの特色ともなっている。わが国でのこの傾向は、昭和40年代に高まることが、たとえば、次の書誌によってもうかがえる。

〔380.8N〕宮本・比嘉・原口共編 日本庶民生活史料集成 全20巻 三一書房 昭43~47 / 〔380.3S〕渡沢敬三編著 絵巻物による日本常民生活絵引 全5巻 角川書店 昭43 / 松宮三郎 江戸の物売 東峰書房 昭43 / 〔382.1S〕佐瀬恒・矢部三千法編著 江戸の諸職風俗誌 展望社 昭47 / 〔380.8N〕日本常民文化研究会編

日本常民生活資料叢書 全24巻 三一書房 昭47~48 /

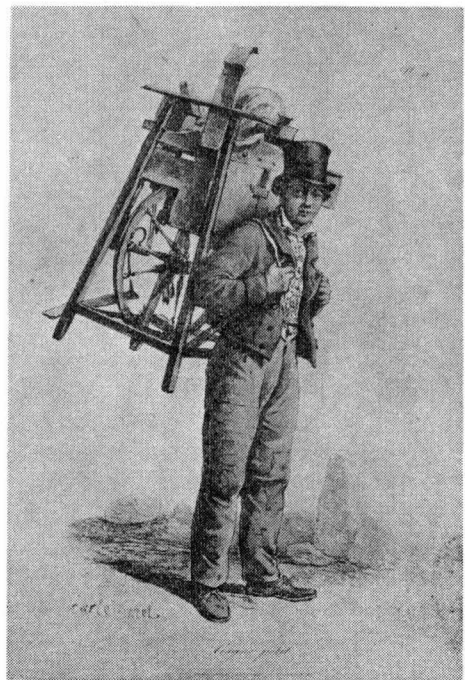
〔382.1M〕宮尾しげお・木村仙秀 江戸庶民街芸風俗誌 展望社 昭49 / 〔382.1M〕三谷一馬 江戸商売図絵 三樹書房 昭50 などである。この場合の庶民とか常民とかの定義は必ずしも明確ではないが、英語の people や common people に当たると考えてよかろう。西洋の場合、こうした人々の服装は civil costume (市民服, 軍服の対語) とか everyday costume (ふだん着, 日常着) などとして多少異なったニュアンスで呼ばれており, folk costume (民俗服), peasant costume (農民服), rural costume (いなかの服, 地方服) などとはまた別の範ちゆう(畴)の概念である。たとえば 〔383.133B〕Barfoot, Audrey; Everyday Costume in Britain, Lond., 1961 / 〔383.1L〕Lister, Margot; Costume of Everyday Life, Lond., 1972 などがそうで、これらはいずれもふだん着とか民衆服と呼ぶにふさわしい。

この意味での民衆服は、日本の絵巻物と同様に、西洋でもさまざまな場面に早くから登場はするものの、表面立つて服装史に取り上げられることはまれである。そうした中において「職人づくし」とか「物売り」の類は西洋でも独特の分野を形成してきており、ここで取り上げる首題の文献もその一つである。

⑤の「古着屋」呼び声は「アピ、ビュー・ガロン、マルシャン・タビ」古びたトップハットをかぶり、軍服らしい赤コートとサーベルを右肩からぶら下げている



⑨の「研ぎ屋」足踏みと碓石をかついで「ほうちゅうやはさみとき」と叫んで歩く、トップハットをかぶりウエスト丈の短上衣によれよれの長ズボンをはいている



正確なタイトルは次のとおりである。

[383. 135V] Vernet, Carle; Cris de Paris, Paris, vers 1820. **カルル・ヴェルネ「パリの呼び声」**であり、街頭の物売り図絵である。この書名は、実は一つの伝統をもつていて類書も多い。Bouchardon, Edme; Les Cris de Paris, 1768/Watteau, L. J.; Cris et Costume de Paris, 1786/Joly, Adrien; Recueil des divers crie de Paris ou les petits acteurs du grand théâtre, vers 1815/Pilinski, Adam ed.; Cris de Paris au XVI^e siècle, 1885などがそうであり、最も早いのはロンドンで刊行された Lauron, Marcellus の The Cryes of the City of London 1711, (仏語版も刊行された)であった。

ヴェルネの名は、18世紀から19世紀にわたって活躍したフランスの画家一族としても知られている。父ジョセフ・ヴェルネ (Claude Joseph Vernet 1714~1789) は有名な風景・海洋画家であり、複製版画家。本書の作者カルル・ヴェルネ (Antoine Charles Horace Vernet, 通称 Carle または Charlot Vernet 1758~1863) は父の仕事を継ぐ一方、戦争画家として知られており、とりわけ石版画にすぐれた才能を発揮した。また彼は、当時の有名な風俗素描・挿絵家であるミシェル・モロー (Jean-Michel Moreau, 通称 Moreau le jeune 1741~1814) の娘婿、つまり、彼の妻はモローの娘なのである。その子オラース・ヴェルネ (Emile Jean Horace Vernert, 通称 Horace Vernet 1789~1863) もその父と同様に戦争画および石版画家として名高い。また本書の刷りを担当したドゥルプシュ (François-Seraphin Delpech 1778~1825) も一級の石版刷師で、当時の有名な画家の描いた肖像画や服装画を石版刷に仕上げた。

本書に登場する 100人の「物売り」をプレート順に記せ

ば、以下のとおりである。

①パン菓子屋 ②さくらんぼの花束売り ③靴磨き ④つの(角)形のウェファース売り ⑤古着屋 ⑥ばらの花売り ⑦兎の皮売り ⑧さば(鯖)の乾物屋 ⑨マロール産のチーズ屋 ⑩ナントール産のパン菓子屋 ⑪サラダ菜売り ⑫豌豆売り ⑬煎じ菜屋 ⑭さくらんぼ売り ⑮新聞売り ⑯鯉売り ⑰手回し琴の奏者 ⑱花売り娘 ⑲研ぎ屋 ⑳牛乳売り ㉑かご屋 ㉒生くるみ売り ㉓雨傘屋 ㉔マッチ売り ㉕しょうが入りパンケーキ屋 ㉖果物売り ㉗スプーン、フォークなどの鋳物屋 ㉘端切れ屋 ㉙巡回靴直し ㉚くるみ売り ㉛メロン売り ㉜ぶどう売り ㉝煙突掃除 ㉞菓子売り ㉟安全ぐさり売り ㊱鳥かご屋 ㊲杓子売り ㊳キャベツ売り ㊴いかけ屋 ㊵梨売り ㊶ボール箱売り ㊷はこべ売り ㊸土売り ㊹卵売り ㊺水運び ㊻かき(牡蠣)売り ㊼富くじ売り ㊽ほうき(箒) 売り ㊾台所用品とボイラーの修理屋 ㊿にしん売り ①マツト売り ②女もの短靴屋 ③狩の獲物屋 ④オレンジ売り ⑤月桂樹売り ⑥ソーセージ売り ⑦石膏細工屋 ⑧焼梨屋 ⑨磨り売り ⑩コーヒー売り ⑪井戸掃除屋 ⑫サヴォイ産のチーズ売り ⑬人形使い ⑭風車売り ⑮手回しオルガン奏者 ⑯小間物の行商 ⑰端切れ屋 ⑱焼栗屋 ⑲脚絆売り ⑳巡回ガラス屋 ㉑スバラガス売り ㉒こがね虫売り ㉓石炭屋 ㉔石挽き ㉕朝鮮あざみ売り ㉖ラヴアンド(香りの高い植物の一種) ㉗ひさし帽売り ㉘くすげい ㉙ブランデー屋 ㉚ビラ張り ㉛街灯の点灯人 ㉜気圧計売り ㉝インキ売り ㉞靴直し ㉟演歌師 ㊱荷運び ㊲手品師 ㊳じゃがいも屋 ㊴犬売り ㊵巻きウェファース売り ㊶フォンテンブロー産の白葡萄酒売り ㊷スイス製傷薬売り ㊸時売り ㊹鉄輪つきの手桶屋 ㊺麦湯売り ㊻犬の毛刈り 以上。



⑳の「端切れ屋」 頭には古帽子を四つも重ねてかぶり 右手には縞や格子柄の端切れ布をもっている 彼の女は同時に女もの古帽子も扱うのである



㉑の「ひさし帽売り」 彼の女が売ったり買ったりするのは前びさしのついた軍帽や学生帽に類するさまざま色の帽子 つまりカスケットである